様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１６２０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2013～2014
課題番号：２５８８４０４８

研究課題名（和文）南北朝士大夫における家と国家の位置づけ―家訓・家伝・家学から―

研究課題名（英文）How intellectuals thought about the meanings of family and nation during Southern and Northern Dynasties

研究代表者
池田　恭哉（Yukiya, Ikeda）

香川大学・教育学部・准教授

研究者番号：５０７０９２３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、混迷を深めた南北朝時代において、士大夫（知識人）たちが自らの根拠地として、家と国家にどのような価値を見出していたのかを、家訓や家学の内容を分析することにより、明るみに出すことである。
　研究の結果、不安定な国家権力の中で如何に家として存続していくかを伝えるものとして、家訓や家学の継承の過程を跡付けた。一方で自らが生きる社会としての国家や、仕官の在り方にも払われた強い関心の内実を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to elucidate how intellectuals thought about the meanings of family and nation during Southern and Northern Dynasties. In order to achieve this purpose, I paid attention to the family precepts and studies, which were very popular in those days.

研究分野：中国哲学

キーワード：家訓　家学　顔之推　『顔氏家訓』　『冤魂志』　盧思道　王通　『中説』

１．研究開始当初の背景

これまで南北朝時代を対象とした研究は、士大夫が生きる社会を「貴族制社会」と規定し、その中での文化の担い手たる士大夫の精神の諸相を、南朝を中心に文学・歴史・思想の各方面から検証してきた。だがそこでは、「貴族制社会」という固定的な枠組みに生きる、南朝士大夫を対象とした考究が目立つ傾向にあったように思われる。

以下（１），（２）に分けて、先行研究の成果と課題を指摘し、そこから見出された本研究の問題意識を記す。

（１）貴族がその価値を社会の中で発揮し得るのは、貴族（士大夫）が有する家柄（家格）によろう。こうした士大夫の「家柄」や「家」に対する認識をめぐっては、一般民衆も含む社会からの「家柄」への期待の存在が指摘されてきた。（谷川道雄「六朝時代の名望家支配について」、「六朝貴族の家政について」など）

だが社会が期待する貴族の「家柄」についてのみならず、貴族自身が「家柄」に何を期待し、そのために如何に振る舞ったのかを考察することが必要なのではないか。

また特に中国大陸では、各時代の「家」の在り方を研究する分野が「家庭史」と称して確立し、南北朝士大夫の家庭形態（家族構成員の具体的な内訳とその人間関係、その内部での経済状況や教育の在り方など、多方面から描出した家族生活の様子）が解明されてきた。（張国剛主編『中国家庭史』全五巻、邵正坤『北朝家庭形態研究』など）

だが実際の家庭形態をめぐっては、その形態を選択した士大夫の意識や意図についても、合わせて考察する必要があろう。

（２）士大夫は、国家に奉仕する官僚でもあった。この点について従来の研究では、南北朝時代の士大夫が安定しない国家へは奉仕の念を持たず、家柄（家格）の維持のみに汲々としていたとする見解が支配的であった。

しかし拙稿「顔之推の学問における家と国家」（『中国思想史研究』第 31 号、2011）及び「北朝と隠逸」（『日本中国学会第一回若手シンポジウム論文集　中国学の新局面』、2012）では、家で受けた教育を根拠に国家に奉仕するという顔之推が抱く士大夫像や、北朝士大夫の強い仕官への欲求を見出した。こうした事実は、士大夫が持つ国家に奉仕する官僚としての側面に関する考察を疎かにした従来の見解からは、説明がつかないのではないか。

以上のような南北朝士大夫の家、あるいは国家に対する位置づけをめぐる問題意識が、本研究課題の申請に至った背景である。

２．研究の目的

上述の「１．研究開始当初の背景」（１），（２）から見出された問題意識に基づいて、それに対応する形で本研究の目的（１），（２）を次のように定める。

（１）先行研究は、社会からの貴族の家柄に対する期待や、彼らの家庭形態の実情を明らかにした。本研究では、これを出発点に、なぜ南北朝時代の士大夫が家をそのような形態にしたのかという、「家」の形態や在り方に対する士大夫の側からの意識や観念を研究することを目的とする。

加えて、貴族たちが自身の「家柄」に何を期待したのか、また築き上げた「家柄」を具体的に如何なる方法で維持と継承しようとしたのか、この二点についても考察することを目的とする。

（２）従来の研究では、南北朝士大夫の意識は専ら家柄（家格）の維持のみに注がれていたとされ、国家に奉仕する官僚としての側面は等閑視されてきた。そこで本研究の第二の目的は、南北朝士大夫における国家の位置付けを明らかにすることにある。

合わせて、先に研究の目的に据えた家に対する意識の考究の結果を踏まえ、南北朝士大夫における家と国家の間の関係性について、南朝と北朝、さらには後世との比較を通して検証していくことをも目的とする。

３．研究の方法

研究の方法としては以下の四点を軸にし、着実な研究の進展を目指す。

（１）まず士大夫にとっての家の位置付けについて考察するために、家訓や家学に着目する。南北朝時代には、家という単位が強く意識され、それを根拠とした家訓が多く遺され、また家学が継承された。その内容を、一つ一つの家訓や家学について検証することは、南北朝士大夫にとって家が有した意義を考察し、またそこから目指された家の在り方を描出するのに大いに役に立つように思われる。

具体的には、家訓としては南北両朝に生きた顔之推『顔氏家訓』を取り上げる。ここに示された顔之推における家の意義については、すでに拙稿「顔之推の学問における家と国家」において考察したが、これをさらに発展させていく。

また家学としては、隋の大儒として名高く、孫の王勃も初唐の文学者として著名な王通とその著作『中説』を取り上げる。この著作の語る内容が、王通の生きた時代からどのように王家の後裔たちに継承され、またその継承の過程で社会に何を発信したのかを分析する。

（２）国家権力の基盤が不安定な南北朝社会において、そこに仕官する士大夫たちは社会に対してどのような意識を持ち、また国家をどのようなものとして捉えていたのかを、彼

らの文章や発言の精読を通じて分析する。
　例えば（１）でも挙げた顔之推の場合、『顔氏家訓』の他に『冤魂志』という著作がある。これについての研究はあまり多くはないが、『冤魂志』と『顔氏家訓』を比較することで、顔之推の社会観が明るみに出されるように思う。
　また顔之推と同じように、北朝において俘囚の身となった盧思道も、国家についての見方を記した詩文を数多く遺している。これを他の作家たちの詩文と比較することで、北朝知識人の国家観を分析する第一歩としたい。

（３）研究方法として、本研究の特色と言えるのが、申請者の専門領域は中国哲学ながら、文史哲という従来の学問区分に縛られない資料の読解を研究の基礎とすることにある。南北朝時代は儒学一尊ではなくなり、文学や史学の地位が相対的に向上したのであり、申請者はこれまでの研究でもその事を常に念頭に置いて、拙稿では韻文や石刻史料などを積極的に用いてきた。豊富な資料に基づいたより精緻な分析から、文史哲を綜合する形で南北朝士大夫の精神の諸相を解明する。

（４）いま一つ、本研究の特徴的な研究方法が、南北朝の中でも特に北朝に多く注意する点である。「１．研究開始当初の背景」でも触れたように、これまでの南北朝時代を対象とした研究では、主として南朝知識人を俎上に載せ、北朝知識人は南朝知識人の影響下において語られることが多かった。本研究では、北朝と南朝を平等に比較し、北朝に独自の思想や価値観を見出していくよう心がける。

４．研究成果
　以下、主な発表論文の内容に沿って、研究成果をまとめていく。

（１）顔之推の家庭観と社会観について
　顔之推は南北両朝を体験し、その中で子孫に伝え残すべき事柄を、『顔氏家訓』二十篇に書きつけている。拙稿「顔之推における『顔氏家訓』と『冤魂志』」（『中国思想史研究』第 35 号、2014）では、この『顔氏家訓』を、顔之推のもう一つの主著『冤魂志』と比較することを通じて、顔之推の家庭観はもとより、社会観についても考察を加えた。
　『冤魂志』には、怨恨を抱えて死んだ人物が、その怨恨の対象者の現世における死を以て報復を果たす物語が並べられている。ところでその物語の中の一つに、『史記』魏其侯列伝の記事に基づくものがあるが、実は同じ記事に基づく話が、『顔氏家訓』の中でも展開されているのである。そして『史記』魏其侯列伝の記事の取り上げ方が、両著作の間で異なっていることに注目したい。
　『冤魂志』では、その他の物語と同様に、魏其侯とその友人・灌夫による報復行為が、全面的に容認されている。そしてそのことにより、人間同士の愛情たる「仁」に依拠した人間関係の構築の重要性を、声高に主張していると言える。
　だが一方で『顔氏家訓』においては、魏其侯とその友人・灌夫による報復行為を、もちろん友人を思いやる行為とはしながらも、同時に社会の中で生きる人間としての立場、すなわち「義」（義理）を考えながら行動するよう注意を促すのである。
　つまり顔之推は、あくまで個人間でのミニマムな人間関係においては、徹底して「仁」を重要視するように、『冤魂志』の中で述べている。だが一人の士大夫として、より広く社会との関わりの中で生きる上では、社会の中での自身の位置付けを意識し、「仁」だけではなく「義」をも勘案するように、『顔氏家訓』の中で述べている。そして『顔氏家訓』では、この「仁」と「義」のバランスを保持するためのものとして、「礼」を大切にするようにとも言っている。この「礼」は、顔之推にとって、自身の備える学問に依拠して士大夫として生きる上で最も重要視されるものであり、そうした生き方の継承を望む家訓に、社会の一員としての立場とその「礼」による維持を要求したことは、顔之推における家庭観と社会観の様相をよく示したものであろう。
　以上をまとめるならば、顔之推は『冤魂志』の中で個人間のミニマムな人間関係の中で「仁」を重視することを述べ、『顔氏家訓』の中では、もちろん「仁」も大切な概念ではあるが、一方で社会との関係性たる「義」にも気を配らねばならず、それを士大夫が最も依拠すべき「礼」によって調整することを求めた。『冤魂志』と『顔氏家訓』には、このような顔之推の書き分けの意識があったのである。

（２）顔之推と盧思道による国家観の比較
　盧思道は、北斉が北周に滅ぼされた際に、北斉を代表する知識人の一人として、顔之推らとともに北周に俘囚の身となった。さて彼らが北斉から北周に連行される際、複数人によって「蟬」を素材とした詩（以下「蟬篇」）を詠じ、今は盧思道と顔之推による作品が残っている。拙稿「新王朝への意識―盧思道と顔之推の「蟬篇」を素材に―」（『六朝学術学会報』第 15 集、2014）では、盧思道と顔之推による「蟬篇」を精緻に読解し、そこに詠じられた新王朝に仕官することに対する思いを描出し、彼らの国家観を対比した。
　両者の「蟬篇」は、蟬の鳴き声に触発されて望郷の念を生じ、これから連行される北周の繁華な都には自身の居場所がないことを嘆くというところまでは、もちろん表現は異なるが、構成自体は共通する。しかしながら、新王朝たる北周にどのような態度で臨むかを表明した最後の部分では、顔之推と盧思道の「蟬篇」は内容が違ってくる。
　まず顔之推であるが、「蟬篇」では自らを

過去の献策の士に擬えている。彼は自らが生まれた梁王朝に尊崇の念を持っていたが、北斉においても、国家の一大事にはしばしば上表を行なった。そうしたことから、新王朝に仕官せざるを得ない状況に至ったからには、自らの知識人（士大夫）としての立場を自覚し、国家のために尽くす人間として生きる決意を、顔之推は「蟬篇」の中で表明したのである。

盧思道の方はと言えば、「蟬篇」の最後で隠逸の士となろうとする旨を表明する。だがこれを額面通りに受け取るのは危険で、彼はしばしば詩文の中で隠逸への憧憬を口にしていながら、実際には新王朝に仕官を続けている。また隠逸を表明することで、却って採用につなげようとする意図の下に物された詩文も歴代多く存在する。以上から、盧思道もまた、顔之推とは異なった言辞によるものではあるが、仕官への意志を「蟬篇」の中に籠めたと認められるのである。

本論文では、顔之推と盧思道を例にとって、北朝士大夫に確実に存した王朝への仕官の意志が確認されるとともに、彼らの王朝に対する見方の一端が明らかになった。

（３）王通『中説』と家学の研究

王通は隋の大儒として名高いが、彼の主著『中説』には素性の怪しい記事も含まれ、それが王通自身の手に成るかをめぐって、これまで数多くの考証があった。また『中説』に展開される思想内容についても、考察がなされてきた。「王通と『中説』の受容と評価―その時代的な変遷をたどって―」（『東方学』第 128 輯、2014）では、王通と『中説』が、後世にどのような評価を受けたのかという点に議論の照準を合わせた。その際に、王通の思想とその著作が、初唐の四傑の一人に数えられる王通の孫・王勃を始めとする王通の後裔たちにどのように継承されたのかという、家学の継承の実態を解明することに、特に意を注いだ。

王通とその著作『中説』の名は、彼が生きていた当時にはあまり世に広まってはいなかったようである。だが『中説』に附録された文章や、王勃の「続書序」などによれば、『中説』自体は王家の後裔たちに読み継がれていったようである。そしてその過程で『中説』には、王通が偉大なる隋の大儒であったかの如き虚飾が施されていったと思しい。

さて韓愈が道統論を提唱すると、それを取り巻く皮日休や陸亀蒙らが、儒家を代表する思想家の一人として俄に王通をクローズアップした。また宋代においても王通と『中説』の内容が分析され、また『中説』の編纂と注釈を施す作業が展開された。だが朱熹による王通を介さない道統説が提起され、しかもそれが思想界において主流となると、王通は道統の継承者としてではなく、諸子の一人として取り上げられるようになり、注目度も減少するのであった。

この論文により、まず王通より始まった王家の家学の継承のあり様が、かなり具体的に跡付けられた。加えて王通および『中説』の何が、如何に着目されたのかを時代の順を追ってたどることで、各時代の思想界が王通と『中説』を介して注目したトピックを知ることができ、それによって一つの思想史を描出することに成功した。

また本論文の執筆の過程では、二つの副産物とも言える成果があった。その一は、北京や上海の主要図書館に赴き、これまであまり存在を知らされてこなかった『中説』の貴重な版本を実見できたことである。ここで得られた知見については、整理ができ次第、公表したいと考える。また第二の成果は、「王通『中説』訳注稿①」（『香川大学教育学部研究報告　第Ⅰ部』第 143 号、2015）の発刊である。これは王通『中説』の全篇に現代日本語による訳と注釈を施そうという計画の第一回目で、今後 10 回に渡って連載する予定である。これまで王通『中説』には全篇にわたった邦訳はなく、また注釈も不十分だった部分が多い。そのためこの連載は、学界に裨益するところ大であること疑いない。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　６　件）

・<u>池田恭哉</u>「王通『中説』訳注稿①」（『香川大学教育学部研究報告　第Ⅰ部』第 143 号、1-19、2015）、査読無

・<u>池田恭哉</u>「王通と『中説』の受容と評価―その時代的な変遷をたどって―」（『東方学』第 128 輯、91-108、2014）、査読有

・<u>池田恭哉</u>「顔之推における『顔氏家訓』と『冤魂志』」（『中国思想史研究』第 35 号、1-31、2014）、査読有

・<u>池田恭哉</u>「新王朝への意識―盧思道と顔之推の「蟬篇」を素材に―」（『六朝学術学会報』第 15 集、41-58、2014）、査読有

・<u>池田恭哉</u>「「桓山之悲」考―典故と用法―（『香川大学教育学部研究報告　第Ⅰ部』第 141 号、1-17、2014）、査読無

・<u>池田恭哉</u>「北魏と杜預をめぐる小考」（『香川大学国文研究』第 38 号、30-40、2013）、査読無

〔学会発表〕（計　１　件）

・<u>池田恭哉</u>「「桓山之悲」小考―「親子の別れ」か「兄弟の別れ」か―」（第 17 回六朝学術学会大会、二松学舎大学（東京都千代田区九段南 2-2-4）、2013.07.06）

〔図書〕（計　０　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０　件）

○取得状況（計　０　件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
　池田　恭哉　（IKEDA　YUKIYA）
　香川大学・教育学部・准教授
　研究者番号：50709235

(2)研究分担者
　　（　　）

　研究者番号：

(3)連携研究者
　　（　　）

　研究者番号：